ぬ、療治も凡微疫をもて、藥したるは速に効をえたりと見ゆ、さてあやしきは邪を病ものは、必袂のうちに毛ありといふ、それは脇毛の落たるならんと嘲る人もありしかど、予が近江の親族の者たもとのうちに、薄赤きいろの毛を一すぢ見つけて、家の内のものどもの病るを、人毎に袂を見せしむるに、皆おなじ、あるひは二すぢ三筋にも及ぶが有しといひき、播磨尾張の國々よりいひこせしも同じ、いとあやしきことなり、予が家に病みしは、はやくてさる噂も聞ざりしかば、心もつかずいかゞ有けん、蠻人より傳へしゆゑに、かゝる毛も生せしにや、必袂の中より操出せしも奇なり、定理をもては論じがたし、

〔時還讀我書上〕文化丙子夏秋ノ際、都下大ニ疫アリ、其症初起遽ニ少陽ヲ犯テ、熱勢熾盛、二日ナラズシテ精神昏憒スルニ至ル、大抵大小柴胡黄連解毒ノ類ノ擬スベキモノ多ク、正陽明ヲナス者ハ少カリキ、老醫ノ話ヲ聽ニ、先年ハ陰症躁擾スル證多カリシト、先敎諭ノ傷寒ヲ治セラレシヲ視ニ、亦多ク參附ヲ用タマヒシナリ、蓋コノ歳ヨリ以後ノ疫ハ、大略此種ノ證ニシテ陰證ハ至テ稀ナリ、風氣變遷ノ然ラシムルモノナランカ、

〔時還讀我書下〕天保庚寅〇元年四月ヨリ六七月ニ至ルマデ時疫アリ、患ル者甚多シ、其症多ハ初ヨリ惡寒ナク熱甚ク、脈緊數ニシテ、大便下利、舌上胎ナク水ヲ欲シ、劇キハ赤斑ヲ發シ、或ハ發黄、或ハ衄血大便血、或ハ齒齦出血スルモノアリ、清熱凉血ノ效ヲ得ルコト多カリシ、サレドモ不治ノ症亦少カラズ、舌胎ト熱候トハ甚相適セザリキ、且其熱ノ解シテ爽快ニ及ブニハ甚日ヲ引タリ、輕症ニテモ一月餘、重キハ二三月ヲ逾ルニ至レリ、邪熱血脈ニ沈漬セシ故ナルベシ、前件ニモ云ヘル如ク、近年ハ攻補温凉トモニ純一ニナシガタキ症多キコトハ、コレ等ニテモ知ルベキナリ、

〔寛天見聞記〕事の序に、先一年の飢饉の事を說ん、天保七年八月、諸國大風雨にて、其年五穀不熟にして、天下大飢饉とぞきこえける、さればば諸色の價次第に上りて、同八年には、御藏前の相場は、百